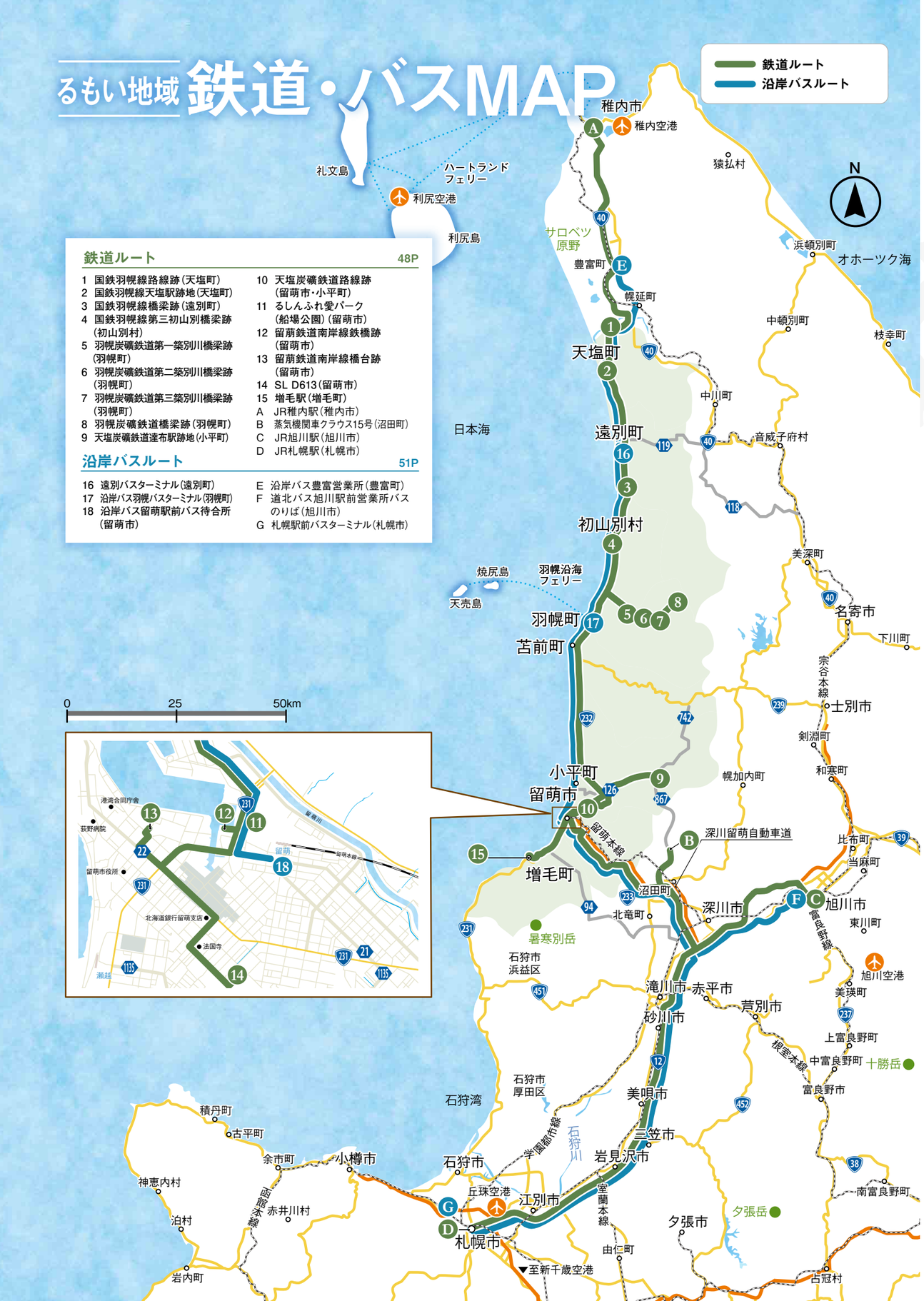
るもい地域 鉄道・バスMAP



鉄道ルート　48P

1 国鉄羽幌線路線跡（天塩町）
2 国鉄羽幌線天塩駅跡地（天塩町）
3 国鉄羽幌線橋梁跡（遠別町）
4 国鉄羽幌線第三初山別橋梁跡（初山別村）
5 羽幌炭礦鉄道第一築別川橋梁跡（羽幌町）
6 羽幌炭礦鉄道第二築別川橋梁跡（羽幌町）
7 羽幌炭礦鉄道第三築別川橋梁跡（羽幌町）
8 羽幌炭礦鉄道橋梁跡（羽幌町）
9 天塩炭礦鉄道達布駅跡地（小平町）
10 天塩炭礦鉄道路線跡（留萌市・小平町）
11 るしんふれ愛パーク（船場公園）（留萌市）
12 留萌鉄道南岸線鉄橋跡（留萌市）
13 留萌鉄道南岸線橋台跡（留萌市）
14 SL D613（留萌市）
15 増毛駅（増毛町）
A JR稚内駅（稚内市）
B 蒸気機関車クラウス15号（沼田町）
C JR旭川駅（旭川市）
D JR札幌駅（札幌市）

沿岸バスルート　51P

16 遠別バスターミナル（遠別町）
17 沿岸バス羽幌バスターミナル（羽幌町）
18 沿岸バス留萌駅前バス待合所（留萌市）
E 沿岸バス豊富営業所（豊富町）
F 道北バス旭川駅前営業所バスのりば（旭川市）
G 札幌駅前バスターミナル（札幌市）

Rumoi Area × Railway & Bus Journey

るもい地域 鉄道・バス旅

産業のあるところに物流あり。るもい地域で水産業や産炭業が栄えると同時にこの地にも鉄路を延ばした鉄道路線は、明治～昭和にかけて多くのニシンや木材、石炭等、そしてガンガン部隊と呼ばれた行商人や出稼ぎの人々を乗せて日本海の沿岸を走り抜けた。各所に残るその遺構を、現代の旅客の要・路線バスで訪ねてみるのはいかがだろう。

※このテーマのページでは、「留萌」の「萌」の字を旧地名や鉄道路線名としての旧字の「留萌」と、現代の地名の「留萌」との両方で表記しています。

オロロンラインを走る沿岸バス「特急はぼろ号」

峠下駅

幌糠駅

留萌駅

藤山駅

大和田駅

今も残る廃線跡と現役の交通路線

ここでは、るもい地域各地に残る、かつての物流の要であった鉄道の廃線跡を中心に、その代替交通となっているバスを合わせて紹介する。

管内に初めて鉄道が登場したのは明治43（1910）年。留萌港への石炭や木材、海産物等の輸送のため深川駅～留萌駅間の留萌線が開業。のち大正10（1921）年に留萌駅～増毛駅間が開業し全線開通した。また留萌駅から北へ延伸した路線は、幌延駅から南へ建設が進められた天塩線と接続し、羽幌線と改称して昭和33（1958）年に全通した。

また、昭和初期から管内各地で炭鉱が開発されると同時に輸送用の炭鉱鉄道も整備された。留萌鉄道、羽幌炭礦鉄道、天塩炭礦鉄道が次々に営業を開始。一部は旅客営業も行い、留萌線や羽幌線と接続して、石炭を満載した列車が留萌港へと走っていった。

現在はほとんどの鉄路が廃止され、残る路線はJR留萌本線の深川駅～留萌駅間のみ。交通手段はバスへと転換され、路線跡には橋梁やトンネルなど多くの鉄道遺構が残されている。

Rumoi Area × Railway&Bus Journey

鉄道ルート

夢と共に歩んだ鉄路の記憶

物流を担い、また地域の人々の貴重な足として、海岸沿い、そして山の奥へとその鉄路を伸ばしたるもい地域の鉄道路線。役目を終えてなお、大自然の中で存在感を放ち続けるそれら鉄道遺構の記憶を探す旅に出てみよう。

《国鉄羽幌線跡》

※（仮）は仮乗降場。駅名、仮乗降場名は廃止当時のもの

留萌（るもい）―三泊（さんどまり）―臼谷（うすや）―小平（おびら）―花岡（仮）（はなおか）―大椴（おおどと）―富岡（仮）（とみおか）―鬼鹿（おにしか）―千松（仮）（せんまつ）―力昼（りきびる）―番屋ノ沢（仮）（ばんやのさわ）―古丹別（こたんべつ）―上平（うえひら）―苫前（とままえ）―興津（仮）（おこつ）―羽幌（はぼろ）―築別（ちくべつ）―天塩有明（てしおありあけ）―天塩栄（てしおさかえ）―初山別（しょさんべつ）―豊岬（とよさき）―天塩大沢（てしおおさわ）―共成（きょうせい）―歌越（うたこし）―天塩金浦（てしおかなうら）―遠別（えんべつ）―啓明（仮）（けいめい）―丸松（まるまつ）―更岸（さきし）―千拓（仮）（かんたく）―天塩（てしお）―中川口（仮）（なかがわぐち）―北川口（きたがわぐち）―振老（ふりおい）―作返（仮）（さくかえし）―幌延（ほろのべ）

1 路線跡（232 振老跨線橋より）天塩町川口

2 天塩駅跡地 天塩町新開通

4 第三初山別橋梁跡（金駒内橋梁） 初山別村豊岬

3 橋梁跡（232 旭橋より）遠別町旭

留萌と幌延を結んだ国鉄最後の廃止路線

昭和2（1927）年に国鉄留萌線の支線として留萌駅～大椴駅間が開通。昭和6（1931）年の古丹別駅までの開業後に羽幌線と改称され、翌年には羽幌駅まで延伸。昭和10（1935）年には天塩線として幌延駅～天塩駅間が開業。羽幌線が遠別駅まで延伸し、天塩駅と接続して全線が羽幌線として開業したのは昭和33（1958）年。往時は急行列車「はぼろ」や「るもい」も運行し地域住民の足として活躍したが、貨物輸送量や利用者の減少により昭和62（1987）年、国鉄の分割民営化直前に廃止。国鉄での最後の廃止路線となった。旅客輸送は沿岸バスへと引き継がれた。国道232号沿いには現在でも橋台や橋梁、トンネル、路盤跡がはっきりと識別できる箇所が多く残り、また各町村の資料館にはゆかりの品が多く展示されている。

《留萌鉄道跡》

11 るしんふれ愛パーク（船場公園）留萌市船場町2丁目114

「留萌」の名を冠すも本社は沼田町に

沼田町の幌新太刀別川流域にあった複数の炭鉱が産出する石炭を運搬する目的で敷設された鉄道。幌新地区から恵比島駅で国鉄留萌線へ接続し、留萌駅から臨港線へ分岐した。留萌港への積み出しを担った臨港線こそがこの鉄道の要であり社名の由来でもある。本社社屋は恵比島駅のそばに存在していた。昭和5（1930）年の炭鉱線の開業後、同年12月に臨港線も開業。南岸線の終端には西留萌駅、北岸線には北留萌駅と仮古丹浜駅が設置された。現在、JR留萌駅北側に整備された「船場公園」はこの臨港線他各路線が接続した操車場跡であり、留萌港には鉄橋や橋台、レールの痕跡が残っている。沼田町幌新の資料館には留萌鉄道関連の資料や留萌鉄道で活躍した蒸気機関車「クラウス15号」が保存されている。

B 蒸気機関車クラウス15号 沼田町幌新381-1

13 南岸線橋台跡 留萌市港町

12 南岸線鉄橋跡 留萌市栄町

北留萌（きたるもい）―西留萌（にしるもい）―仮古丹浜（かりこたんはま）―分岐点（ぶんきてん）―留萌（るもい）―（留萌線に接続）―恵比島（えびしま）―本通（乗）（ほんどおり）―幌新（ほろしん）―袋地（乗）（ふくろじ）―新雨竜（しんあめりゅう）―宝沢（乗）（たからさわ）―太刀別（たちべつ）―昭和（しょうわ）

※（乗）は乗降場。駅名、乗降場名、接続路線名は廃止当時のもの

5 第一築別川橋梁跡（356 春水橋より）羽幌町曙

6 第二築別川橋梁跡（356 鶴亀橋より）羽幌町曙

8 橋梁跡（356 小川橋より）羽幌町築別

《羽幌炭砿鉄道跡》

築別（ちくべつ）―五線（ごせん）―七線沢（ななせんざわ）―上築別（かみちくべつ）―曙光（しょこう）―曙（あけぼの）―桜ケ丘（さくらがおか）―古賀町（こがまち）―築別炭砿（ちくべつたんこう）―三毛別（さんけべつ）―名羽線（未成線）

※駅名、接続路線名は廃止当時のもの

7 第三築別川橋梁跡（356 勧倹橋より）羽幌町曙

14 SL D613（見晴公園）留萌市見晴町2丁目 見晴公園内

羽幌の隆盛を支えた当時最大手の鉄道会社

太陽曹達による羽幌炭砿の開発に伴い、昭和16（1941）年に築別駅～築別炭砿駅間が営業開始。昭和33（1958）年からは旅客も行い、曙～羽幌坑を結ぶ三毛別支線も開業。鉄道開業時から羽幌炭砿自体も羽幌炭砿鉄道株式会社の経営となり、本社は札幌の大五ビル（現存）に置き札幌証券取引所にも上場する大企業であったが、昭和45（1970）年の閉山により鉄道事業も廃止。その後旅客輸送事業は沿岸バスに譲渡された。

戦時の物資不足で中古品をかき集めて作られた橋梁は、見た目ですぐに分かるほど段違いになっているのが特徴的。写真のほか第四、第五築別川橋梁も残っている。羽幌町郷土資料館には、駅名標など様々な資料が残され、また留萌市の見晴公園には、羽幌炭の輸送に活躍したSL車両が静態展示されている。

幻の鉄路「名羽線」

羽幌炭砿鉄道の三毛別支線はもともと、国鉄が羽幌線と深名線朱鞠内駅との接続路線「名羽線」として計画し昭和37（1962）年に着工した路線。羽幌本坑や上羽幌坑の開坑に伴う出炭量の増加による羽幌線や留萌線の過密を解消するために計画され、三毛別より先の予定区間には橋梁やトンネルなどがほぼ完成しており、羽幌炭砿閉山時も名羽線の工事は凍結されなかった。正式に継続を断念したのは平成元（1989）年になってからだ。

現在も、羽幌二股ダム周辺には橋脚や橋梁、トンネルが残り、ファンの間では「幻の鉄道」とも呼ばれている。

Rumoi Area × Railway&Bus Journey

沿岸バスルート

オロロンラインを行く国内屈指の長距離バス

現在のるもい地域の重要な交通基盤であり、地域の人々にとってなくてはならない生活の足として活躍する沿岸バス。日本海を横目に、オロロンラインを北へ南へと走りるもい地域と札幌や旭川、宗谷とを結ぶバスで地域を巡る旅もまたいいものだ。

現在、るもい地域の主要な交通インフラとして住民の生活を支えているのが、羽幌町に本社を置く沿岸バス株式会社。その歴史は古く、大正15（1926）年4月に瀧川五郎吉という人が始めた羽幌～天塩間の乗合旅客運送事業が始まり。旧国鉄羽幌線や羽幌炭砿鉄道なき後の旅客事業を引き継ぎ、守り続けている。

現在は、293㎞にも及ぶ札幌～豊富間を結ぶ国内でも有数の長距離路線「特急はぼろ号」や、豊富留萌線、留萌旭川線といった都市間路線や、留萌市内線、羽幌町内線のほか、羽幌港連絡バス「観音崎らいな号」などを運行している。

⑯遠別バスターミナル（遠別町）

⑯遠別バスターミナル

遠別町本町6丁目

国鉄羽幌線遠別駅の跡地に建つ。ほかにも羽幌や初山別も、羽幌線の駅跡地をバスターミナルとして利用している。

⑰沿岸バス 羽幌バスターミナル

羽幌町南7条4丁目22-1

国鉄羽幌線羽幌駅の跡地。このほか、本社・本社バスターミナルが羽幌町南3条2丁目2・2に位置している。

⑰沿岸バス羽幌バスターミナル（羽幌町）

⑱沿岸バス 留萌駅前バス待合所

留萌市栄町1丁目62-2

この待合所と本社バスターミナル、遠別営業所、豊富営業所で下記の缶バッジを販売中。

都市間バス

白地に青と赤のラインが沿岸バスの定番デザイン。特急はぼろ号などでも使われている。

「萌えっ子キャラクター」たちが管内各地で活躍中です。

るもい地域や近郊の地名などから名付けられた、沿岸バスの「萌えっ子キャラクター」たちが活躍中。グッズや留萌管内PR動画「オロロンロボ メビウス」のパイロットに起用されるなど、バス会社のキャラクターを越えた活動を展開している。沿岸バスHPに全キャラクターを掲載中。

全てはここから始まった。一部の路線バスが乗り放題となる広域周遊切符として2009年度に発売開始。その「第1シーズン」で萌えっ子たちが登場以来、毎年登場キャラが変わりファンの心を鷲掴みにしている。

二頭身になった萌えっ子たちがあしらわれ、2012年から発売開始。毎年デザイン違いが限定発売されている。沿岸バス本社や各営業所などで、1個200円（税込）で販売中（一部完売のデザインあり）。

（問い合せ）沿岸バス株式会社
本社／羽幌町南3条2丁目2-2
TEL.0164-62-1550（代）
HP／http://www.engan-bus.co.jp/

沿岸バス 路線図

るもい地域と周辺都市を結ぶ沿岸バスの路線。札幌からは留萌まで高速道路経由の便のほか、海沿いを通り増毛を経由して羽幌までの便もある。最長の「特急はぼろ号」札幌～豊富間は、乗車時間なんと約5時間！

萌えっ子ラッピングバス
羽幌沿海フェリーをモチーフにしたキャラクター「観音崎らいな」が特急はぼろ号の車体に踊る。

羽幌港連絡バス
天売・焼尻航路のフェリー乗り場と羽幌本社ターミナルを結ぶ、その名も「観音崎らいな号」。

留萌 — 春日町 — 桜山 — 天塩本郷 — 沖内 — 寧楽 — 天塩住吉 — 達布

※駅名は廃止当時のもの

《天塩炭礦鉄道跡》

⑨達布駅跡地

小平町達布

天塩炭礦の石炭を人石留萌研究所へ輸送

北炭（北海道炭礦汽船株式会社）が昭和になってから開発を始めた天塩炭礦の石炭を、北海道人造石油株式会社留萌研究所へ運ぶことを目的に敷設された炭鉱鉄道。すでに「留萌鉄道」が存在していたため、旧国名の天塩から命名された。留萌駅～達布駅を結び、達布森林鉄道も接続。人造石油事業が頓挫したため昭和26（1951）年からは炭鉱事業を天塩鉄道自ら経営したが、昭和42（1967）年、採炭事業の終了とともに鉄道事業も廃止された。留萌市の道道1048号や小平町の道道1006号は、路線跡を転用したものである。

廃線後にはてんてつバスの営業所が置かれていたが、現在はそれも取り壊されてしまった。

⑩路線跡

1048 留萌市・小平町境

留萌市春日町と小平町桑園とを結ぶ「萌平トンネル」は、廃線後のトンネルを拡幅流用したもの。

てんてつバス

「天鉄」の代替バス

昭和36（1961）年に路線バス事業免許を取得した天塩鉄道バス。天塩炭礦鉄道解散時の昭和42（1967）年事業譲渡を受け、旅客輸送の代替バスを運行した。本社は留萌市。現在は滝下～達布～小平市街を結ぶ「小平町デマンドバス」を運行している。

電話での完全予約制で、利用者を自宅近くまで迎えにいく形態のデマンドバス。

⑮生まれ変わる増毛駅

鉄道駅としての役目を終えまちの新たな観光拠点に

平成28（2016）年12月のJR留萌本線留萌～増毛間廃止に伴い、鉄道駅としての役目を終えた増毛駅の駅舎が、まちの新たなシンボルとして生まれ変わるため、再整備中だ。

駅舎を大正10（1921）年の開業当時の姿に近付け、その大きさは現在の面積の約2倍に。歴史的景観が残る増毛の町並みに馴染むよう改修され、バスターミナルとしての機能や写真などを展示するスペースも併設する予定で、まちの観光拠点として整備される。

平成30年3月まで改修を行い、一般開放は4月中旬ごろからを予定。新しい姿に生まれ変わる増毛駅を楽しみに待とう。

改修後のイメージ図。ホーム跡には彫刻家の五十嵐威暢氏作のモニュメントが設置される予定。（イメージ図：増毛町提供）

留萌線留萌～増毛間開通と同時の大正10（1921）年11月に開業した増毛駅（写真は平成28年9月撮影）。
所在地／増毛町弁天町

レールを取り囲むように、通路や広場が設置される予定。（イメージ図：増毛町提供）